

## 体育実技科目における障害理解促進への取り組み

佐藤 紀子

### Initiatives for Promoting Understanding of Disabilities in Physical Education

Noriko Sato

#### 1. はじめに

N大学歯学部では、2003年度より第1学年の体育実技に「アダプテッド・スポーツ」の要素を含んだ学習項目・内容を取り入れている。用具やルール、実施方法を工夫することで全ての人々がスポーツに参加し、能力を発揮できるようになることを受講生が知り、生涯にわたりスポーツに親しむ素養を育成することが目的である。加えて、アダプテッド・スポーツを通して、受講生が障害について理解し、共生社会の実現に寄与できるようになることを意図している。

授業において、受講生はバレーボールという競技を通して、用具やルール、実施方法を変化させることで、対象となる参加者が異なってくることを体験する。その後、視覚障害者（全盲者）がバレーボールを実施するために必要なルール、用具、実施方法の工夫について考える。この一連の授業プログラムの中に障害疑似体験が取り入れられている。授業のまとめとして、ICF（International Classification of Functioning, Disability and Health, 国際生活機能分類）から、アダプテッド・スポーツは、そのスポーツを実施する人の特性（心身機能・構造や個人因子）に用具やルール、方法等（環境因子）を適合させたスポーツであることを理解する。

本稿では障害を理解するための教育プログラ

ムを概観し、その後、N大学歯学部における体育実技での障害理解促進のための取り組みを紹介する。

#### 2. 障害理解教育プログラム

##### (1) 疑似体験

疑似体験とは、目隠しをしたり、車いすを使用したりするなど、身体的、感覚的な障害を模倣する活動（French, 1992）で、しばしば障害理解教育の手法、ツールとして用いられる。

しかしながら、批判的な意見も多い。Frenchは、障害者の困難や問題、能力不足や欠けている部分に焦点を当てることは、障害を理解するには不正確で、障害者の能力を低く見積もるものである。疑似体験は望ましくない固定観念や誤解を生み出すと批判している。中瀬（2024）は大学生に対して、高等学校までに経験した障害理解のための授業内容をどのように感じたのかを調査し、疑似体験の中でも特にアイマスク体験についてネガティブな記述が多かったことを報告している。小野・徳田（2006）は、10分程度のアイマスクを着用した視覚障害歩行シミュレーション（手引き歩行）では、体験者の目が見えないことへの不安や恐怖心を高めるだけになる。そして、そのことが視覚障害者は常に不安や恐怖心と闘う存在であると認識され、

特別視へとつながると指摘する。

一方で、疑似体験によってネガティブな感想やステレオタイプの考えを持ったとしても、気づいたという点で、無関心や気づいていない状態よりは、障害理解は進んだと捉えることができる(山本ら, 2007)という意見もある。しかしながら、疑似体験の内容については、十分な検討が必要である。西館(2005)は疑似体験においては「できない」で終わるのではなく、「どうしたら解決できるか」を体験しなければならないと指摘する。芝田(2013)も、障害者の生活における不便性と困難性を理解すると同時に、それを克服することができる可能性があるというポジティブな側面の理解を目的にした疑似体験には意義があり、疑似体験は視覚障害の理解には不可欠であると述べている。

谷内(2012)は、疑似体験を実施する前に目的の明確化をおこなわずに実施していることが問題だとしている。視覚障害者ガイドヘルパー養成講座における疑似体験が、ガイドヘルパーとして視覚障害者に対する配慮を学ぶことを目的としておこなわれていることを例に挙げ、疑似体験をおこなうことは「目的」ではなく、ガイドヘルパーとしての技術を習得するための「手段」であると指摘している。建築を学ぶ学生が視覚障害疑似体験を通して、自身が設計した住宅作品の問題点を見つけ、改善案を提案できるようになったという報告がある(西尾・中野, 2010)。これは目的を明確にした疑似体験の例であろう。

つまり、疑似体験を障害理解教育に用いる際には、その目的を明確にし、内容と実施方法を考慮することが重要である。

## (2) 社会モデルの理解

国連の障害者権利条約や障害者基本法、ICFは障害の「社会モデル」を取り入れており、現在、障害を理解する上で、社会モデルの視点が主流となっている。

東京2020オリンピック・パラリンピック競技

大会のフィールドキャスト(大会ボランティア)<sup>注1)</sup>に対し、多様性を前提とした共生社会の実現に向けた障害教育・人権教育としておこなわれたのが「障害平等研修」(Disability Equality Training: DET)である。DETでは、障害の社会モデルを障害理解の基礎とすることを特徴としている(久野, 2025)。

障害の社会モデルとそれに対する個人モデルについて、久野(2018)は以下のように説明する。個人モデルは、個人の機能障害が原因で「障害」(差別や不平等、排除や参加制約)が起こるととらえる。「正常」という一定の心身の機能を保持しないことが、課題を引き起こす原因とみなされ、その改善が優先的な解決策となる。一方、社会モデルは、機能障害と「障害」という二つの課題があることは認める。しかし両者の間に原因と結果という関係性はないと考え、「障害」は機能障害によってではなく、多様な人々を考慮しない社会や環境の障壁によって引き起こされると考える。多様性を受け入れるインクルーシブ(包含・包摂的)な共生社会の形成が解決策となる。

久野(2017; 2018)は、障害理解の研修として機能障害の疑似体験だけでは、障害の個人モデルの視点や理解を促してしまい、差別や排除という課題を見えづらくする点に留意が必要だと指摘する。

田中ら(2021)は、障害の社会モデルを土台、基礎として疑似体験・介護体験を実施することで、その経験は環境との関係で理解され、環境の変容や工夫を考案する材料となると述べている。松原・佐藤(2011)も、機能障害のある人々に対して、ある状況が「障害」として出現する場面に実際に寄り添い、その意味づけを相互承認する過程に参加することで、「障害」を疑似経験できるとし、このような障害の「社会モデル」を発見する体験を含むプログラムを「障害協働体験」と名付けている。

### (3) スポーツを通じた障害理解

スポーツを媒体とした障害理解教育の有用性についての言及が散見する。佐藤（2018）は、アダプテッド・スポーツを教材とした授業の後に、大学生の障害者や障害者スポーツに対する興味や関心が高まることを報告している。谷内（2012）は障害当事者とともにおこなうユニバーサルスポーツ<sup>注2)</sup>体験プログラムでは、機能障害によってできないことがルールや用具の工夫によって、できる状態に変わることを学べると指摘し、このようなプログラムは思考・想像力を養うと述べている。また、児童を対象に障害理解教育の系統的なプログラムについて検討した楠ら（2012）も、すべての人が楽しめるユニバーサルデザインのスポーツ等を考えて、実際におこなう思考・活動型の授業がユニバーサルデザインの精神を育てるとしている。

ユニバーサルスポーツやアダプテッド・スポーツは障害理解教育のツールとして有用であることが推測される。

### 3. N大学歯学部第1学年「スポーツ健康科学1」

#### 障害理解のための取り組み

先行研究から、障害理解教育のプログラムと

して疑似体験を取り入れる場合は、目的を明確にすること、「できる」体験あるいは、どうしたら解決できるかを体験できるような内容にすることが必要だといえる。また、障害理解プログラムでは社会モデルの視点を基礎とすることが重要であり、アダプテッド・スポーツやユニバーサルスポーツは障害の理解促進に有用であると考えられる。ここでは、先行研究の知見をもとに構成されたN大学歯学部の「スポーツ健康科学1」の障害理解促進への取り組みを紹介する。

「スポーツ健康科学1」は第1学年前期に開講される体育実技科目である。授業は1学年を2クラスに分け、さらにクラスを2つのグループに分けて実施されている。1グループの人数は35名程度である。年度によって若干の違いはあるが、男女の比率はほぼ半々であり、男女共習で授業がおこなわれる。

表は2025年度の授業スケジュールである。授業は学習項目「健康づくり運動」・「生涯スポーツ」を担当する教員と「アダプテッド・スポーツ」を担当する教員、2名で運営される。

ここで学習項目「アダプテッド・スポーツ」での障害理解のための具体的な取り組みを紹介

表 スケジュール

回	クラスと時間		学習項目	
	5,6限	7,8限	グループ①	グループ②
1	A	B	ガイドダンス	
2	A	B	体力チェックテスト①	
3	A	B	体力チェックテスト②	
4	A	B	健康づくり運動①	アダプテッド・スポーツ①バレーボール
5	A	B	健康づくり運動②	アダプテッド・スポーツ②ソフトバレーボール
6	A	B	生涯スポーツ①	アダプテッド・スポーツ③ふうせんバレーボール
7	A	B	生涯スポーツ②	アダプテッド・スポーツ④視覚障害疑似体験
8	A	B	生涯スポーツ③	アダプテッド・スポーツ⑤ユニバーサルスポーツ
9	B	A	アダプテッド・スポーツ①バレーボール	健康づくり運動①
10	B	A	アダプテッド・スポーツ②ソフトバレーボール	健康づくり運動②
11	B	A	アダプテッド・スポーツ③ふうせんバレーボール	生涯スポーツ①
12	B	A	アダプテッド・スポーツ④視覚障害疑似体験	生涯スポーツ②
13	B	A	アダプテッド・スポーツ⑤ユニバーサルスポーツ	生涯スポーツ③
14	B	A	まとめ	

する。

### (1) 学習項目「アダプテッド・スポーツ」

学習項目「アダプテッド・スポーツ」は用具やルール、方法等を工夫することで、全ての人がスポーツに参加し、能力を発揮できることを経験し、理解すること、アダプテッド・スポーツを通じて障害についての理解を促進することを目的としている。

授業では通常のバレーボール、基礎技術のパスが安全で容易にできるよう工夫されたソフトバレーボール（日本ソフトバレーボール連盟, 2022）、重度の運動機能障害のある人が参加できるように考案されたふうせんバレーボール、下肢障害のある人のためのパラリンピック競技でもあるシッティングバレーボール、視覚に障害のある人のためのフロアバレーボールといった多様なバレーボールを扱う。バレーボールという競技を通し、受講生はトレーニングや練習を積んだ若者、技能や体力の低い人、こども、高齢者、立位でプレイできない人、重度の運動機能障害のある人、視覚に障害のある人がゲームに参加し、能力を発揮するための用具やルール、実施方法の工夫を実際に体験し、アダプテッド・スポーツの考え方を学ぶ。

### (2) 障害理解のための取り組み

障害理解のための疑似体験が第3回目（ふうせんバレーボール）、第4回目（視覚障害疑似体験）の授業で取り入れられている。

#### 1) 第3回目：ふうせんバレーボール

第3回目の授業では、ふうせんバレーボールが教材である。鈴の入ったゴム風船をボールとして使用し、バトミントンのコート（6.10 m × 13.40 m）とネット（1 m55 cm）を用いておこなう。風船は大きく、柔らかく、軽い。また落下速度が遅いという特徴がある。

この風船の特徴を活かしたふうせんバレーボールは重度の運動機能障害のある人が参加できるように考案された競技である。全員参加の

概念がルールに取り入れられ、コート内のプレイヤー全員が風船に触れてから相手コートに返すことを基本としている（ふうせんバレーボール振興委員会, 2025）。

授業では、1チーム6名のプレイヤーがゲームに参加し、全員が必ず1度、しかも1度だけ風船に触れて相手コートに返球するといったルールを基本として、4つの異なるルールでゲームを実施する。

一つ目のルールでは一般的なバレーボールと同様に立位でおこなう。風船の動きに慣れない受講生は最初こそ戸惑いを見せるが、徐々にその特徴を理解してくると、課題の易しさから、退屈に感じている様子を見せることもある。

二つ目のルールでは、全員が臀部を床につけた欠損・切断といった下肢障害の疑似体験といえる状態でプレイする。座位の状態動くことに慣れていない受講生は、立位の時と比べて、風船の落下地点への移動が困難となる。

三つ目のルールは、全員が立位でおこなうが、コート上の2名（前衛左側と後衛中央のプレイヤー）は所定の位置に置かれた直径85 cmのフラフープ内のみ移動できるといった制限を設ける。このルールでは風船を打つ順番を考慮しなくてはならず、一つ目の立位のルールに比べて難易度が増す。

三つ目のゲームを終えた後に、風船に入れられた鈴の理由について、受講生に問いかける。すると、ほぼすべての受講生が、風船の中の鈴は視覚障害者とその位置を把握するためだと回答する。それが正しいかどうかを確認するために、四つ目のゲームでは各チーム2名がアイシェード<sup>注3)</sup>を着用し視覚を制限した状態で、立位でゲームをおこなう。アイシェードをし、視覚障害疑似体験としてゲームに参加した受講生は、コート内に立ち尽くすか、視覚を制限していない他のプレイヤーに風船を身体に当ててもらったり、手を取られ、風船を打たせても

らったりするかのいずれかである。

実際に全盲のプレイヤーが補助者なしで鈴の音を頼りに風船の落下位置に移動したり、風船に手を伸ばしたり、その位置を判断し打ったりすることは困難である。日本ふうせんバレーボール協会（2018）のルールでは、風船を確認できる距離が1 m以下の視覚に障害のある選手には「ブラインドアタック」というルールが適用されている。コート内のプレイヤー全員がボールに触れた後で、重度視覚障害のある選手がボールを補球した時点で、プレイは一度中断され、ボールを補球した選手はアタックライン後方に移動し、そこからアタックをしてプレイが再開されるというものである。



図1 ブラインドアタック  
(北九州市障害者スポーツ協会, 2022)

北九州市障害者スポーツ協会（2022）が作成した動画（図1）からは、アイマスクをした全盲の選手を晴眼者が後ろから誘導している様子が見て取れる。また、ふうせんバレーボール振興委員会（2018）のSNSには、「視覚障害を持つメンバー。ふうせんの中には鈴が入っていますが何より仲間の声かけやタッチが頼りです。」とのコメントも見られる。風船の中の鈴の音は誰かが風船を打った際に音になるため、どのあたりのプレイヤーが風船に触れたかを把握することはできるが、その音を頼りに、能動的・主体的に位置を把握し風船を打つことは困難だといえる。

ふうせんバレーボールでの疑似体験から、受講生は下肢障害のある人は風船を使ったバレーボールならばできる。視覚障害者は鈴の入った風船でも打つことはできず、バレーボールをおこなうことは難しいと捉えてしまうおそれがある。受講生の理解をこの段階でとどまらせないために、第4回目の授業が展開される。

## 2) 第4回目：視覚障害疑似体験

第4回目の授業は、ふうせんバレーボールでの経験を踏まえつつ、アダプテッド・スポーツ、そして障害について正しい理解を深めることを目的とする。

最初に受講生は、主に下肢に障害のある人がおこなうシッティングバレーボールの試合映像を視聴する。この競技では、ボールは通常のバレーボールが用いられる。座位でおこなうため守備範囲を狭くした6 m × 10 m のコート、男子1 m15 cm、女子1 m05 cmの高さのネットを使用する<sup>注4)</sup>。シッティングバレーボールはパラリンピックの競技でもあり、映像では激しいラリーの応酬が展開される。第3回目のふうせんバレーボールにおける座位でのプレイの経験から、立位でプレイできない人は落下速度の遅い風船を用いてバレーボールをおこなう以外の選択肢がないという誤った認識を、受講生に持たせないためにシッティングバレーボールの映像を用いる。トレーニングや練習を積むことで、下肢に障害のある選手が素早くコートを移動し、強いアタックヒットを打てるようになることを受講生は知る。

次に受講生は、重度の運動機能障害のある人たちがふうせんバレーボールを楽しむ映像を視聴する。そして、全盲の視覚障害者が晴眼者の誘導で風船に手を触れさせてもらっている画像（図1）が紹介され、風船の鈴の音を頼りにその落下位置に移動したり、自分から風船に手を伸ばして意図した方向に打ったりすることが困難であること、つまりふうせんバレーボールの

用具, ルールや方法では, 視覚障害者, 特に全盲の人は能力を発揮できないことを再確認する。

その後, 全盲の視覚障害者が自身で判断し, 決定でき, 能力を発揮するための用具, ルール, 実施方法を受講生に考えさせるために, 視覚以外の感覚について説明をおこなう。その際に, 視覚障害疑似体験をツールとして用いる。視覚を制限し(アイシェードを着用し), ペットボトルからプラスチックコップに水を注ぐ体験である<sup>注5)</sup>。受講生は, 聴覚や皮膚感覚の触覚や温度感覚, 深部感覚の位置感覚, 運動感覚, 振動感覚や重量感覚を用いて, ペットボトルの水をコップに注ぐ。深部感覚は筋の収縮や関節の屈伸などによって生じる感覚で, 意識にのぼることがほとんどない。このような視覚以外の感覚を用いることができる用具, ルール, 実施方法にすることで, 全盲者がスポーツに参加し, 能力を最大限に発揮できることを受講生に理解してもらう。

2010年代, N大学歯学部では視覚を制限し, 晴眼者の誘導で歩行する疑似体験を授業に取り入れたことがある。この時, おこなった調査で, 「障害のある人がスポーツ・運動するのは危険である」と考える受講生が授業後に増加した。普段視覚に頼って生活をしている受講生が, 暗闇の中で歩くことによって感じた不安や恐怖が影響したものと考えられる(佐藤, 2012)。この時の反省を活かし, 現在では, 移動を伴う疑似体験を用いないようにしている。

疑似体験後に視覚障害者がバレーボールに参加するための工夫を受講生が実際に考案することで, より理解が深まると思われる。しかしながら, 時間数の都合上, 実施が叶わないため, 視覚障害者が参加する競技の映像を用いる。

まず受講生はボールに金属の粒が入った音の鳴るボールを使用するブラインドサッカーの映像を視聴する。晴眼者のキーパーや敵陣ゴール

裏に位置するコーラーが, フィールドプレイヤーに声や音などで情報を与える。またサイドライン上にフェンスがあるので, それに触れることでプレイヤー自身も立ち位置の判断が可能となる。こういった工夫により, ブラインドサッカーでは, プレイヤーはボールの位置やゴールの方向を自身で判断し, パスやシュートができる。

ブラインドサッカー同様に音が鳴るボール(風船)を用いるにもかかわらず, なぜふうせんバレーボールでは, その位置を判断するのが難しいかを受講生に考えさせる。

ジーニアス英和辞典(南出・中邑, 2023)によると, バレーボールの“volley”は, ボールが地につかないうちに打ち・蹴り返すことを意味している。つまり競技中, ボールはつねに空間で扱われる。一方でサッカーはボールが地を転がる局面が多く, ブラインドサッカーのボールは転がることで音を発生させる。そのため, ボールの位置の判断が可能となる。それに対し, 風船の鈴は空間では音が鳴りにくいため, その位置をとらえることが困難となる。

全盲や弱視の視覚障害者がプレイできるように考案されたのがフロアバレーボールである(全国盲学校フロアバレーボール大会, 2025)。フロアバレーボールの大きな特徴はボールを転がすことである。ゴールボール, サウンドテ-



図2 フロアバレーボール

ブルテニス、グランドソフトボールなどのように視覚障害者がおこなう球技の多くは、ボールを転がすことでその位置を判断できるような工夫がなされている。バレーボールはボールを床に落とすことなくプレイする競技であるという固定観念にとらわれてしまうと、視覚障害者が能力を発揮できるバレーボールは生まれてこなかったと思われる。

全盲者が前衛を担当し、ネット際にしゃがんだ状態で転がるボールの音を聞きプレイし、後衛は弱視者が保有視力を用いて立位でプレイする。ボールは通常のバレーボールが用いられ、弱視者が見やすいように白い色のものを使用するが、音が鳴るような工夫はなされていない。全盲者はボールが床を転がる音からその位置を判断する。前衛の全盲のプレイヤーはボールに触れていない場合にはネットに触れることが許されているため、自身のコート内での立ち位置や身体の向きを確認することが可能となる。また、後衛の弱視選手から相手プレイヤーの動き、ボールが自陣コートに打たれるコースなどの情報が与えられる。

受講生はフロアバレーボールの映像(図2)を視聴し、適切な用具やルール、実施方法が整うことで、全盲の視覚障害者が素早い動きでコート内を走り、守り、アタックヒットを打つことが可能なことを知る。

加えて、視覚障害者のふうせんバレーボールへの参加を否定するものではないことも受講生には伝える。体力や年齢、スポーツに取り組む目的の違いによって、仲間からのサポートや声掛けで楽しむふうせんバレーボールを好む視覚障害者がいることを理解してもらう。

### 3) 社会モデルの理解

第14回目、まとめの授業において、ICFを用いたアダプテッド・スポーツの考え方の説明がおこなわれる。

視覚に障害のある人(Aさん)がバレーボー

ールを実施する際の「障害」について、ICFを用い、解説すると以下のような内容となる。

視覚障害(心身機能・構造障害)のあるAさんは、自分の能力を発揮し、思い切り動けるスポーツがしたいと考えている(個人因子)。一般的なバレーボールの機会が提供された(環境因子)が、空間でボールの位置を把握したり、相手コートに打ち返すことはできず、ゲームに参加することができない(活動制限)。ゲームに参加できないため、Aさんはチームに所属し、キャプテンといったような役割を得ることができない(参加制約)。

一方、視覚に障害のある人の特性に用具やルール、実施方法を合わせたフロアバレーボール(アダプテッド・スポーツ:環境因子)があれば、Aさんはゲームに参加し、思い切り身体を動かすことができる(活動)。Aさんはチームのエースとなり、フロアバレーボールを普及するような役割を得ることができる(参加)可能性がある。

Aさんには機能障害はあるが、視覚以外の感覚を用いることができる用具やルール、実施方法が整備されることで、スポーツに参加することができないという「障害」はなくなることを受講生に伝える。

「スポーツ健康科学1」の障害理解促進の内容は、ここまでであるが、後期「スポーツ健康科学2」において、アダプテッド・スポーツの考え方の復習とともに、障害の個人モデル、社会モデルの考え方を受講生に伝えている。

### 4. まとめ

現在、多くの学生が小中高等学校の段階でなんらかの障害理解教育を受けてきていると考えられる(中瀬, 2024; 庄司, 2013)。しかしながら、佐藤(2021)がN大学歯学部第1学年学生を対象にした調査では、障害の社会モデルの考え方は、入学間もない学生には浸透してい

ないことが指摘されている。本稿では体育実技における障害理解教育の取り組みについて報告した。教育内容・方法の検討のためには、今後、受講生の障害のとらえ方が、授業を受講したことによって、どう変化したかを調査していく必要がある。

庄司(2013)は、障害について学ぶことは、人が多様であることを学ぶことであり、人権を学ぶことである。障害のある人の生き方を考えることは、自己理解を促し、自己実現に向けた発達を促す。その観点から、社会に出る前、自己の生き方の具体的選択の段階にある大学生が、障害理解の学習をおこなう意義は極めて大きいと指摘する。

将来、歯科医師となる学生に対して、今後も、障害理解促進への取り組みを科目の中で継続しておこなっていきたい。アダプテッド・スポーツを通して障害の社会モデルについて理解を促し、受講生自身が、社会や環境の障壁をなくしていく行動の主体になれるよう、体育実技科目の教育内容・方法を検討していきたい。

#### 【注】

注1) 東京都(2022)によると、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会では70,970人のフィールドキャスト(大会ボランティア)が活動した。

注2) 定義はまだ定まっていないが、ユニバーサルスポーツとは、その場にいる人々が年齢や性別、障害の有無、体力や体格の違いによって有利不利が生まれないように工夫された用具やルールを用い、皆が公平に参加できることを目指したスポーツである(佐藤, 2024)。

注3) アイシェードとは、スキーのゴーグルのレンズを黒く塗りつぶし、光が入らない状態にしたものである。視覚障害のある人の球技、ゴールボール等で選手が着用

する。

注4) 通常のバレーボールコートのはしらは9 m × 18 m, ネットの高さは大学生・一般男子で2 m43 cm, 女子で2 m24 cmである。

注5) 第4回目に取り入れている疑似体験として、受講生に二人組を作らせ、アイシェードをつけているパートナーに言葉のみで運動をさせるというような内容も取り入れている。この疑似体験の目的は的確な説明がどのようなものかを受講生が考えられるようになることである。

#### 【文献】

French Sally (1992) Simulation Exercises in Disability Awareness Training: a critique. *Disability, Handicap & Society*, 7 (3): 257-266

小野聡子・徳田克己(2006) 視覚障害歩行シミュレーション体験が体験者の不安、恐怖心に与える影響-障害理解教育の視点から-。障害理解研究, 8: 37-46

北九州市障害者スポーツ協会(2022) ふうせんバレーボール ①ルール解説. 公益財団法人日本パラスポーツ協会. <https://www.youtube.com/watch?v=4QXl734CU7Y> (2025-9-1 参照)

楠敬太・金森裕治・今枝史雄(2012) 児童の発達段階に応じた系統的な障害理解教育に関する実践的研究-教育と福祉の連携を通して-。大阪教育大学紀要 第IV部門, 60 (2): 29-38

久野研二(2017) 障害平等研修(DET). 異文化間教育, 45: 9-18

久野研二(2018) 社会の障害をみつけよう——人ひとりが主役の障害平等研修. 現代書館

久野研二(2025) トピックス~第25回「リハ協

- カフェ」登壇報告〜リハ協カフェ：途上国における障害平等研修の展開. JANNET 障害分野 NGO 連絡会, 258: 2-3
- 佐藤紀子 (2012) 「アダプテッド・スポーツ」の授業が歯学部生のスポーツや障害者に対する意識に及ぼす影響. 日本大学歯学部紀要, 40: 49-56
- 佐藤紀子 (2018) 大学の一般体育実技における「アダプテッド・スポーツ」を用いた授業の教育効果. 総合文化研究, 23 (3): 49-70
- 佐藤紀子 (2021) 歯学部第1学年学生の「障害」との考え方. 日本大学歯学部紀要, 49: 23-29
- 佐藤紀子 (2024) インクルーシブスポーツとしてのボウリングの可能性. 日本大学歯学部紀要, 52: 43-51
- 芝田裕一 (2013) 人間理解を基礎とする障害理解教育のあり方. 兵庫教育大学研究紀要, 43: 25-36
- 庄司和史 (2013) 大学生の障害理解学習について―「特別支援教育の理論」履修前アンケート調査より―. 信州大学人文社会科学研究, 7: 159-173
- 全国盲学校フロアバレーボール大会 (2025) フロアバレーボール. <http://floor-volleyball.com/rule-2/> (2025-9-1 参照)
- 田中恵美子・平井佑典・野澤純子・奥平真砂子・下尾直子 (2021) 障害の社会モデルの啓発・理解促進に向けた授業の開発. 東京家政大学研究紀要, 61 (1): 97-104
- 谷内孝行 (2012) 地域における「障害理解プログラム」の実施に関する一考察. 桜美林論考. 自然科学・総合科学研究, 3: 63-71
- 東京都 (2022) 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会フォローアップ報告書 (全体企画・競技). [https://www.2020games.metro.tokyo.lg.jp/followuphoukoku\\_5\\_zentaikyugi\\_8.1.11.pdf](https://www.2020games.metro.tokyo.lg.jp/followuphoukoku_5_zentaikyugi_8.1.11.pdf), 405 (2025-9-1 参照)
- 中瀬浩一 (2024) 大学生はどのような障がい理解教育を受けてきて、どのように考えたか. 同志社教師教育研究, 2: 34-43
- 西尾幸一郎・中野莉沙 (2010) 視覚障害疑似体験を活用した設計教育プログラムによる教育的効果の検討. 日本福祉のまちづくり学会福祉のまちづくり研究, 13 (1): 1-10
- 西館有沙 (2005) 間違った障害理解教育1 - 苦勞の強調・安易なシミュレーション体験・美談仕立て -. 障害理解 心のバリアフリーの理論と実践. 徳田克己・水野智美編, 誠信書房, 110-116
- 日本ソフトバレーボール連盟 (2022) ソフトバレーボール入門. <https://japan-softvolleyball.com/information.html> (2025-9-1 参照)
- 日本ふうせんバレーボール協会 (2018) 協会ルール2018.8.19. <https://nihon-fusen.jimdofree.com/ルール/> (2025-9-1 参照)
- ふうせんバレーボール振興委員会 (2018) Facebook 投稿 2018年11月13日. <https://www.facebook.com/watch/?v=1924384444296905> (2025-9-1 参照)
- ふうせんバレーボール振興委員会 (2025) ルール概要. <https://fusenvolley.jimdofree.com/ルール概要/> (2025-9-1 参照)
- 松原崇・佐藤貴宣 (2011) 障害疑似体験の再構成 疑似体験から協働体験へ. ボランティア学研究, 11: 85-98
- 南出康世・中邑光男 (編集主幹) (2023) ジーニアス英和辞典 (第6版). 大修館書店
- 山本壮則・池田聡・永田忍・金森裕治 (2007) 障害理解学習の現状と実践的課題についての基礎的研究. 障害理解学習の現状と実践的課題についての基礎的研究, 30: 33-44